



衣笠病院グループ 創立 75 周年記念礼拝 (2022 年 8 月 6 日)

説教 「 **上を仰いで、<sup>ちり</sup>塵の中から明日を見つける** 」

評議員・前チャプレン室長

**佐藤 千郎 牧師**

聖書 マタイによる福音書 25 章 31～46 節

そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』

「衣笠病院 25 年の歩みは、戦後の日本史を地で行くようなものであった。敗戦直後の極度の窮乏と混とんとした中で、病める者戦禍を蒙った人々の苦悩は大きかった。長い戦争で、病院や民間の医療機関の疲弊は著しく、薬も不足し、十分にその機能をはたしていなかった。大都市とくに旧海軍の拠点であったところは、ほとんどの施設が解体されて、これに変わるものが出来ていなかった。こうした中で、日本基督教団は、横須賀米海軍司令官デッカー大佐の勧めにより、旧海軍関係の病舎を譲り受けて、基督教精神に基づく病院を創設することになった。」

今から 50 年前の 1972 年に発行された「衣笠病院、25 年のあゆみ」

の冒頭で、当時の理事長・末包敏夫氏が書かれている文章です。この文章からは、戦争という、人類が経験する最も悲惨で醜い現実をくぐり抜けても、大都会が焼け野が原になり、全てが灰となり塵となっても、なお失われることのない愛への信頼が読み取れます。

戦勝国の司令官であるデッカー大佐は、自分の部下たちや母国アメリカの信頼できる団体によって、衣笠病院を設立したのではありません。戦時中、大佐にとって敵国である日本、それも侵略戦争に協力した日本基督教団に、病院の創設を勧め・その運営を任せただけです。衣笠病院が戦争の落とし子と呼ばれる所以です。病院だけではありません。ご存じのように、同時期に、横須賀基督教社会

館、現在の横須賀学院が、デッカー大佐の勧めにより誕生しています。

戦いに敗れ瓦礫の町と化した横須賀への愛、それも神の愛と主イエス・キリストの十字架による罪の赦しに信頼し、「**あなたの敵を愛しなさい**」と語られた主イエスの愛に倣って横須賀を愛したその愛がなければ、姿を現すことのなかった施設が、今年創立 75 周年を迎えている衣笠病院グループであることを、戦争の悲惨なニュースが毎日テレビで流されている今年、わたしは、特別な思いで心に留めています。

## §

先日の衣笠病院創立 75 周年記念講演会で、当日の講師、阿部志郎先生が講演の終わりの方で、私たちに必要なのは、「**上を仰いで、塵の中から、明日への希望を見出す**」ことだと言われました。創立記念礼拝のメッセージを考えていた私にとって、この言葉は、衣笠病院の誕生を、そしてその後の

病院の歴史を、一言で語りうる言葉として、感動をもって、心に深く響きました。

この言葉の少し前で、阿部先生は「ディアコニア」という単語にふれ、ひとびとに仕える奉仕を意味するディアコニアは、～を通り過ぎるを意味する「ディア」と塵を意味する「コノス」と言う二つの言葉から出来ていて、「ディアコニア」とは塵の中を通ることを意味しており、病者、弱者、虐待を受けている人たち、即ち塵のごとく扱われている人たちの中に、共にいることがサービス、奉仕であることを指摘しつつ、私たちに必要なのは「**上を仰いで、塵の中から、明日への希望を見出す**」ことだと話されました。

衣笠病院創設を勧めたデッカー大佐はじめ、創立に関わった人たち、呼びかけにはせ参じた医師、看護師など、誕生間もない病院を支えた人たちは皆、上を仰いで、塵の中から、明日への希望を見出した人たちでした。

衣笠病院は、あの時から75年の歴史を重ね、今日、私たちは、

復興記念室と呼ばれているこのチャペルで、礼拝をもって創立75周年を記念しています。この場所で、私たちが衣笠病院の創立と歴史を記念している、そのことに込められている意味は、決して見過ごしてはならないものです

## §

このチャペルが、どのような経緯で設計され、病院の建物の中に組み込まれていったのか、わたしは知りません。ただ、このチャペルの正面壁面のデザインに、かつてチャプレンとして在職したことがある私には、特別な思い出があります。

お寺のご住職もそうですが、キリスト教の牧師も「お務め」から一日が始まります。衣笠病院のチャプレンをお手伝いするようになってからのわたしのお務めは、病院に出勤しますとまず、このチャペルでお祈りをするのでした。

そんなある日のことです。その日は月初礼拝と呼ばれている、毎

月の月初めに行われている特別な礼拝の日でした。月初礼拝では、毎月欠かさず、先ほど大野チャプレンにお読みいただいた聖書の箇所の前半の部分が読まれます。

「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」という聖句を改めて心に留めるためです。この聖句は衣笠病院創立の精神を伝える聖書の言葉として、今も受け継がれているものです。

神様が、わたしの記憶にも残らないような小さなたった一つの行いも、見落とすことも、見逃すことなく心に留め、労ってくださる、祝福してくださると言うこの言葉は、大きな励ましです。毎月、月の初めに新たにこの言葉を心に留め、その月を歩み始めることの幸いは、衣笠病院が先輩から受け継いでいる大切な宝のひとつと言えましょう。

ところがその日は、十字架と16本の柱に向き合って祈っていたわたしの心に、今まで感じたことのない衝撃が走りました。

16本の柱は、この病院の重大な

過失で生じた火災により失われた命です。そのうちの半分8名は生まれたばかりの新生児たちです。命の確かで安全な誕生を手助けし、その命を守るべき使命を背負った病院が、命を奪ったのです。それはまた、誕生を待ち焦がれていた、それぞれの家族に約束されていた喜びを奪った悲劇でもありました。

ところが、失われた命を記念する柱の前で、私たちは毎月、月のはじめに、「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」という聖句を読んでいるのです。この言葉には、先があります。同じたどえの中で、「この最も小さい者のひとりにしなかつたのは、わたしにしてくれなかつたことなのである」と言われているのです。

「わたしにしてくれなかつた」、この言葉こそ、罹災者を記念しているチャペルでは、読まれるべき聖書の言葉なのではないか。そうであるのに、何故わたしたちは、「わたしにしてくれた」という言葉を、毎月読み続けているのだら

うか。私は、祈る言葉を失いました。

## §

その後の経緯について、今お話しする時間はありませんが、私はやがて、先ほど引用させて頂いた言葉を借りて申し上げると、「**上を仰いで、塵の中から、明日の希望を見出す**」という奉仕の心、ディアコニアをカタチにしたのが、この壁面のデザインではないか、これこそが衣笠病院火災後の復興に心血を注いだ人たちを動かした精神であり、更に、衣笠病院創立まで遡ることの出来る精神ではないか、と言う思いに至ったのです。

イエス・キリストを通して示された私たちの神は、無から有を生み出す神です。すべての罪を贖い、存在価値のない塵の中に、豊かな恵みを分かち合う明日を創造する神です。壁面のデザインは、この神からのメッセージを今も、私たちに明確に届けています。私にとっては忘れ難い経験となりま

した。

病院火災は、16名の尊い命と共に、建物も、病院に対する信頼も失い、苦労の中でそれぞれに積み上げてきたもの一切を無にしてしまう出来事でした。「この最も小さい者のひとりにしなかったのは、わたしにしなかったことなのである。」という言葉が現実となった出来事です。

25周年記念誌には「ごうごうたる、冷たいジャーナリズムからの批判……」という文章も見られます。罹災者はもちろんのこと、遺された職員たち、これまで病院を支えてきた人たちからも、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか。」という、十字架にかけられた主イエスの悲痛な叫びが聞こえてきます。

創立10年余りを過ぎ、軌道に乗り始めた病院にとって、この火災は、助けを必要とする人たちへの奉仕に生きてきた人たちが、一夜にして、見捨てられた人、弱い者、小さい者、助けを求める者になった出来事、ディアコニアに生きていた人たちが、一瞬にして、

コノス、塵になった出来事でもありました。

ところが、多くの先輩たちによって語られてきたように、この悲劇が、絶望的な状況の中でもなお失われることのない神の真実、神の摂理、即ち神と共にあるディアコニア、主イエスの愛と共にあるディアコニア、祈りを伴ったディアコニアから、祝福が約束された明日が失われることはないその真実を明らかにしたのです。私たちが信頼を置いた神、無から有を生み出す神は、まさに塵の中に存在する明日だからです。

## §

聖書に「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つのことばで生きる。」という言葉があります。神の口から出る一つ一つの言葉が、塵の中に隠された明日を浮かび上がらせるのです。絶望の底に突き落とされた人々の、明日へ向かう勇気を甦らせるのです。

16本の柱の一本一本が、今も、

あの時何が失われたかを物語っています。そのあまりの大きさに、亡き人たちへの冥福を祈りつつ、私たちは言葉を失います。真ん中に掲げられている十字架に、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか。」という主イエスの十字架上の叫びが重なります。

しかし、「明日のことまで思い悩むな、明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労はその日だけで十分である。」という、もう一つの主イエスの言葉が、冥福を祈るわたしたちのこころを動かします。私たちの存在が塵となっても、労したことすべてが無に帰しても、その存在を否定せず肯定し、必死で生きた一日を労う神の赦しと神の愛が、このイエスの言葉に込められているからです。75年の病院の歴史の節々に思いを巡らしつつ、上を仰ぎ、神の言葉に聞く者のこころに届けられる神さまからの労いの言葉です。私たちが、神の口から出る一つ一つの言葉で生きているしるしです。

このチャペルは確かに罹災者を記念する鎮魂の場所です。しかし同時に神さまからの労いを頂く場所でもあります。復興記念室と名付けられたこの場所で、「この最も小さい者のひとりにしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」という言葉をお聴くことの出来る幸いを、病院創立を記念するこの日、是非、心に留めて頂きたいと思います。このことが、昔も今も変わることのない、神様の永遠の祝福のしるしだからです。

## §

衣笠病院創立記念日を覚え、16本の柱とその真ん中に十字架が置かれている壁と向き合っていると、助かるいのちを助けられなかった厳しく絶望的な状況の中でも、なお上を仰ぎ、「この最も小さい者のひとりにしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」と言うみ言葉を、新たな派遣の言葉として受け止め、無から有を生み出す神を信じて明日の歴史を刻んできた衣笠病院が思

い出されます。そして、医療者に託された神様からの「ミッション」・ディアコニアを、希望を失わないで果たしていくその原点が、このチャペルにあることを、改めて思わされることです。

最後に、日頃から衣笠病院グループを物心両面でお支えくださっている方々を、記念礼拝に於いて覚え、皆様方一人一人の上に、神様の豊かな祝福をお祈りいたします。

また、いまこの時、衣笠病院グループの施設に入院、入所し、共に衣笠病院創立 75 周年をお迎える皆様に、神様の癒しと平安をそして祝福お祈りいたします。



礼拝当日ご祝辞をくださった日本基督教団総幹事の秋山徹先生が、同教団の機関紙にコラムを掲載くださいました。

横須賀にある社会福祉法人「日本医療伝道会衣笠病院」創立75周年の記念礼拝(8月6日)に教団からの祝辞を求められました。この病院の創立の経緯を見ると、1947年8月1日に35名の医療スタッフと80床の病院として出発した最初は、「日本基督教団衣笠病院」となっています。教団立の病院であったことに驚かされます。現在も一貫して「日本医療伝道会」の名前を保持してチャペルを設け、教会とキリスト者を中心とした総合的な医療と社会福祉の働き

として大きく発展し、地域に仕える姿を証し続けています。言うまでもなく、横須賀は在日米軍の重要な海軍基地として、原子力空母が入港する港

**剣を打ちかえて 鋤となす**

として世界に知られている街です。これは「終戦後の混乱と窮乏の中、横須賀に着任した米海軍横須賀基地司令官のベントン・W・テッカー大佐の熱心な激励により、キリスト教の精神

に基づき医療奉仕をすることを使命として日本基督教団衣笠病院として開設」との事情が伝えられています。横須賀には横須賀基督教社会館もあり、これも同じ事情によって開設された施設です。まさに、「剣を打ちかえて鋤となす」働きがこの横須賀の地で継承されているのです。日本基督教団として、ここに、この働きがあることを銘記して、共に祈り支え合う交わりにあることを覚えなければなりませんと思われました。

(教団総幹事 秋山 徹)

『教団新報』(4978・4979 合併号)  
2022年8月6日より

## 聖書

### マタイによる福音書 25 : 31 ~ 46

<sup>31</sup>「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。<sup>32</sup>そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、<sup>33</sup>羊を右に、山羊を左に置く。<sup>34</sup>そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。<sup>35</sup>お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、<sup>36</sup>裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』<sup>37</sup>すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。<sup>38</sup>いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。<sup>39</sup>いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』<sup>40</sup>そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

<sup>41</sup>それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。<sup>42</sup>お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、<sup>43</sup>旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』<sup>44</sup>すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』<sup>45</sup>そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』<sup>46</sup>こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」